

頑固者の人生を考える

— ジェイムズ・アラン・マクファーソンの短編小説 「忠実な信徒」を読む —

“Why Did I Have to Marry a Man with a Hard Head ?” : On James Alan McPherson’s “The Faithful”

儀 部 直 樹

GIBU Naoki

世の中の変化について行けない人

人工知能の開発によって、これまで人間が従事していた職業や仕事が将来相当数なくなるといわれている。となると果たして今後世の中はどれくらい変化していくのだろうか。しかし人工知能が盛んな世の中になった時に、かえって見直されたり必要とされたりする人間の知恵や技術もあるのではないか。なぜならば、それまで人間がしていた仕事を人工知能搭載のロボットや機械がかわりに効率的にたくさんやってくれることで、その分人間には時間ができ、人間は自分に与えられたその貴重な時間の中でじっくり物を考えることができる。そしてその思考の結果、再評価される仕事もあるだろうし、新しく生まれる仕事もあるだろうから。ただし条件がある。その思考のテーマが、人間の幸せとは何か、ということではなければならない。

人工知能とは言わなくとも、これまで、その時代の最先端技術や流行文化は人々の生活に多様な変化をもたらしてきた。反面、そういう進化発展にともなう世の中の急激な変化について行けなくなって社会の中で取り残されてしまう人、生きづらさを感じる人も必ずいる。けれどもその人たちが幸せになれる道もどこかにあるのではないか。

そこで、たとえ人が世の中の目まぐるしい変化について行けなくなったとしても、自身のその生き方を少し変えるだけで、本当はそこまでその人物は孤立しなくても済んだのではないか、ということをジェイムズ・アラン・マクファーソン (1943–2016) の作品のある主人公を通して考えていきたい。

作品は、マクファーソンのピューリッツァー賞受賞作 (1978年) で、十二編の短編小説によって構成された『エルボー・ルーム』 *Elbow Room* の四番目に収められている「忠実な信徒」 “The Faithful” である。物語の時代設定は、この短編集の初版出版年 (1972年) とほぼ同時代と思われる。主人公は中年の黒人男性ジョン・パトラー John Butler で、アメリカのおそらく南部の、黒人共同体で理容店を営み日曜日には黒人教会で説教を行なう牧師である。パトラーは、頑固一徹な生き方しかできない性格の持ち主である。彼のその頑迷さは、一つは、理容師としての技術と接客、もう一つは、牧師としての説教の自身と信徒との人間関係の中に、はっきりと表れている。

理容師バトラーの目に映る世界

まずは、物語の冒頭段落を引用したい。

暇な月曜日の朝 (on a slow Monday)、理容師のジョン・バトラーは店の窓の外を眺めている。いつものとおり、ぱりっと糊のきいた白い上着姿で立ち、バトラーが眺めているのは、大通りに溶け合っていく色の列である。それは彼の本業にとって生きた広告でもある。掃除の行き届いていない窓のせいで色はぼやけている (The colors are blurred)。赤いレタリングは勝手に色あせて行き、ほとんど外郭線しか残っていない。通りを行く人の中には、バトラーには見覚えのない顔もある。しかし、窓の向こうのバトラーに気づいて手を振りながら足早に通り過ぎて行く人もいる。店とは一切関わりたくないために、バトラーの存在に気づかぬ振りをする人もいる。人々はバトラーの会釈に気づくこともなく、ゆっくりと彼の視界から消えていく。それでもバトラーは、窓の縁とドアの間の、自分の定位置に立っている。見慣れた顔の一人が店に一瞥もくれずに窓の傍を通り過ぎると、バトラーもきまり悪さを感じ、目をそらしてしまう。仕事をしている人間のことなら彼は心の中で許せる。しかし、怠惰な人間、失業者、通りを四六時中ほっつき歩く連中のことは我慢ならない (In his mind he forgives the workers; but the shiftless, the workless, the timeless strollers up and down the avenue he does not spare)¹。

理容店の窓が汚くレタリングが色あせている、という描写はバトラーの人物像の一部を表わしている。彼は自分には甘く他人には厳しいようだ。理容師が、糊のきいた仕事着を着るのは当たり前のことである。けれども、客商売なのだから理容店の窓拭きもバトラーの仕事ではないか。窓はいわば店の目である。それとレタリングは、店の看板なのでいつも街角に映えるようにしておかなければならない。窓とレタリングは常に大勢の人の目に触れるものである。大通りで店を構える者は、通りを歩く人々と店の人間との無言のコミュニケーションを大事にしていかなければならない。そのコミュニケーションの入り口が、ピカピカに磨かれた窓と鮮やかに引き立って見えるレタリングである。店主が店の窓をきれいにするという行為は、店主が自身の心の視界を良くし、澄んだ目で外界や他者を見たいという気持の表われであると解釈できる。

したがって、「色はぼやけている」という描写は、バトラーの心の目が曇っていることを暗示しているように思われる。彼は他人を決めつけて見ている。人々はそれぞれの毎日を抱えて、バトラーの目の前を通り過ぎて行くのである。失業中の身の上であっても、みんながみんな好き好んでそうなったわけではない。行き交う人の流れの中には様々な人の事情や感情も流れている。それゆえ、自分の店の表の手入れを怠っているバトラーが、その人たちを見て、許す、許さない、我慢ならないとか、そういうふう勝手に査定するようなことをしてはならない。引用文の slow はこの場合「活気のない、不景気な、退屈な、つまらない」の意味である。つまり暇ということである。とはいってもこれは、バトラーにとっての「暇な月曜日の朝」であり、往来する人たちのすべてにあてはまるわけではな

い。バトラーは、少なくともこの時点では労働者としては暇なのである。もしも自分の仕事に厳しい人間ならば、労働をしていない今のこの自分に我慢ならない、のではないか。文章には描かれていないが、バトラーは不機嫌な表情で、汚れた窓越しに外の光景を見ているのであろう。

理容店の中

店内の様子はどうなっているのか。客はいない。「街の人間はみんな相変わらずわれらを餓死させようとしている (They still tryin' to starve us out) (ER, 62)」とバトラーは、店の者に言う。私は、バトラーのこの愚痴にも彼の傲慢な部分を感じる。それと前週も店の客の入りが悪かったことも推測できる。世間が自分たちを飢えさせようとしている、とバトラーが思うのは、彼が共同体に生きる人々やその人々の生活を冷たい目で見ているからである。

マクファーソンが師と仰いだアフリカ系アメリカ人作家のラルフ・エリソン Ralph Ellison (1913-94) は、あるインタビューの中で、黒人共同体における「床屋」の重要性について述べている。エリソンは幼年期、少年期をオクラホマ市の黒人共同体で過ごした。彼はそこでのクラスメートとの触れ合い、黒人文化の奥深さの発見、を通して「肯定」の人生観を持ち続けることができる。また、この自己重要感ともいえる精神を確固たるものにしてくれる人や文化とも出会う。その一人が、ジミー・ラッシング Jimmy Rushing という黒人ブルース歌手である。ラッシングは中流階級の出ではない。当時まだ若齢のラッシングは、エリソンたち子どもの黒人にどう映っていたのか。次のエリソンの話は興味深い。

ごくたまにひょっこり町に帰ってきてくれたジミーは、黒人の生活を徹底的に肯定してくれる (very affirming) 何か、言葉ではとても言い表すことのできない気分を、表現してくれたのです。もちろんジャズ以外にほら話もたっぷり聞かせてくれました。そんな自慢話がなされるのには前提条件が必要でした。つまり、われわれの他には聞いている人は誰もいないとか、われわれが白人社会に判断されていないということがほんとうに確認できている場合です。少なくともこの種の話は、白人に判断されていないと「思える」時、もしくは白人の視線が気にならない状況下でしか披露されません。たとえば黒人の本音が一番聞ける場所は黒人が経営する床屋です。気取らない自然な肯定的空気を発見するには、土曜日にふらっと床屋に立ち寄るに尽きますね。そちらの方が月に一度だけ黒人大学に通うよりもよほどいいのです。まあ、そんなふうに思えますね (For instance, there is no place like a Negro barbershop for hearing what Negroes really think. There is more unselfconscious affirmation to be found here on a Saturday than you can find in a Negro college in a month, or so it seems to me)²。

エリソンは自分らしく生きるための秘訣を若い黒人歌手ラッシングから学び取る。学校

では教えてくれない、黒人生活の様々な要素を肯定する態度を、ラッシングを通して習得する。エリソンは、これは「頭ではなく心の問題 (a matter of the heart than the mind)」³ だと言う。ラッシングはいわば、幼いエリソンの心に大切な影響を与えてくれる教師だった。さらにここでは、コミュニティにおけるコミュニケーションの場として理容店の果たす役割も、強調されている。

床屋談議、という日本語がある。それは昔日本では床屋が政治談議の場であったことから、転じて今は世間話を指す。日本では、理容店は世間話をする場ということだろうが、アメリカの黒人共同体においては、もっと本音の言える特別な空間、環境なのである。エリソンとマクファーソンの年齢差は三十歳である。エリソンの少年期は、1970年頃を描いたマクファーソンのこの物語の時代よりも、四十年以上も昔のことであろう。しかし、このエリソンへのインタビューの日付は1961年の12月であり、理容店については現在形でその重要性が語られている。したがって、このことは、パトラーの時代にも大いにあてはまるといえる。

店の営業種目が若者の流行に合っていないからパトラーの店が流行らない、のは確かである。けれども店に客が寄りつかないのは、営業種目だけの問題ではない。パトラーの考え方、態度に問題がある。パトラーは、自分の店を、黒人たちが本音を言える、気取らない自然な肯定的空気に満ちた場にしてあげられていないからである。パトラーに理容師としての誇りがあれば、彼は、客が来ないから自分たちは飢えてしまう、というような愚痴は言わないはずだ。もしも身の不遇を託つ客がいたら、パトラーは客のその愚痴を上手に聞いてあげて、相手を徹底的に肯定し、自己重要感を与えて、ほっこりした気持ちにさせ、散髪を終えた客を、それぞれの持ち場に送り出してあげなければならない。

パトラーと従業員の関係

パトラーの店には、もう一人の理容師であるレイ・パウエル Ray Powell がいる。そのほかにその日は、ミックキー・ノリス Mickey Norris という少年もいる。ミックキーは店の従業員ではない。彼は店で靴磨きをして小銭を稼ぐために学校をさぼってきたのだ。加えて、チェッカーゲームに興じる二人のプー太郎もいる。

そのもう一人の理容師レイは、どんなタイプの人間なのか。

レイは、褐色の肌をした太った男で、いつも効率よく仕事をしているという印象を与えたがる。たとえば、自分の黒い櫛の歯の間にハンドタオルの端を走らせたり、自分の頑張り具合を誇張するために唇をすぼめたりする。「週が始まったばかりですからね、牧師さん (Reverend)」とレイは言う。「商売もきっと回復しますよ (Things are bound to pick up)」(ER, 63)

この引用文から容易に認められるように、レイは、自分が忙しく働いているように見せる調子のいい男である。彼はひたむきな努力をする性質、黙々と働くタイプの人間ではない、しかし、それでも理容師が本業であるレイにとっては、自分が働いている店の景気に

自分の生活がかかっている。彼には養わなければならない家族もある。したがって、レイは店をなんとか繁盛させたい。そのことにおいては、レイは真剣である。

一方バトラーは、店の営業種目に対して頑なな態度を取っている。すでに述べたように、バトラーは自分の店を、共同体の人間関係にとって不可欠な、黒人文化の一つの良き伝統の場にできていない。あまつさえ従業員の生活に対して責任のあるビジネスマンとしても成功していない。次の場面には、バトラーの接客の様子が描かれている。

正午をちょうど過ぎた頃、レイはお昼を食べに道路を横切って行き、ミッキーは夕方まで街をぶらつくために出て行った。すると、一人の若い男がドアを開けて店の中をのぞき見る。男の髪は、巨大な三重冠のようにその頭をすっぽりと包んでいる。彼に似合う緑のシャツとベルボトムズは、自分の財産を見せびらかしているようだ。バトラーは最高のもてなしの笑顔を投げかけ、椅子から立ち上がる。

「短時間で済ませるといくらだい？」とその若い男はドア越しに訊ねる。

「時間にかかわらず、二ドル五〇セントか、たぶん三ドルってとこでしょうか」とバトラーは答える。

その若い男は鼻を鳴らし、ふざけ半分に驚いたそぶりで、両腕をぐいっと後ろにのばす。「ええ『調髪』するだけで？ まさか、あんた、俺のこの印象を台無しにするつもりはないだろう？」

バトラーの笑顔は消えかかり、声は小さくなる。「それはない」と言う。

「お客さんは、他へ行ったほうがいいですね。私は不器用なもんで」

若い男は声を立てて笑う。「不器用じゃ、金が入らないから、商売はあがったりじゃないのか？ (A heavy hand make a rusty register in your business, don't it?)」。男は、理容師が返事を考えつく前に、店のドアから姿を消す。(ER, 63)

男の言葉は、makes が make、doesn't が don't になっていることから文法的には正しくないが、ユーモアがある。「不器用な手がさび付いたキャッシュレジスターを作る」で「もうからない」と言いたいのだ。面白い若者である。こういう面白い人間がひいきにしてくれたら、店の雰囲気も明るくなるのだろうが、残念なことにバトラーはこの若者の客を逃がしてしまう。これは、彼の技術不足だけが原因ではない。バトラーが時代の風潮に心を閉ざしているせいである。

1970年頃から、若者のファッションとヘアスタイルは大きく変化する。この男の恰好のように派手になる。体の線がくっきり出るくらいのピチピチの細いシャツ、腿にぴたっと張り付いて、膝から下は大きく広がるベルボトムズ。ヒールの高いロングブーツ。それと、パーマで細かく縮らせて丸く膨らませた髪型であるアフロヘア。反対に直毛にするためのストレートパーマも登場する。華やかなファッションは時代が元気になりたい、というサインである。若者たちがファッションを通して自己を表現しているのである。黒人は、貧しくても、差別されていても、ファッションや音楽においては世の中に対して大きな影響力を持っていた。この自己表現は彼らの自己肯定の表れである。

自己肯定とは、自分を大切にしたい気持ちである。この自分を愛する気持ちは人生をもっと生きたい、という希望の感情である。一人でも多くの黒人の若者が、たとえ貧困や差別

の中にあっても自己肯定の心を持つようになると、絶望によって引き起こされてしまう凶悪な犯罪も減っていくことにもなる。黒人の、とりわけ若者の自己肯定観を形成することは、安全な社会を作ることにつながる。その自己肯定の精神を育む大事な機会を提供してくれる場所の一つが理容店であるということは、取りも直さず、バトラーも安全な社会作りに寄与できる一人になりうるということである。

まずは若者を店に引き込む工夫がバトラーには求められる。理容店にとって集客は、従業員の生活を安定させることであり、同時にそれは、黒人の若者の自己肯定の精神を基盤とする健全な社会実現のスタートでもある。若者の要求に応えるだけの技術が自分になれば、自分より若い従業員にその技術と接客の役割を担わせればいい。しかしバトラーにはそれができないのである。

バトラーと古い客の関係

理容店主は、店を若い客層に好かれるようにしなければならないし、それと同時に古い客との関係も大切にしなければならない。果たしてバトラーは、馴染みの客をどう扱っているのか。

その日の最後の客が、三人の常連だった。ジョン・ギルモア John Gilmore、ディック・ケンドリックス Dick Kendricks、ウィリー・ラッセル Willie Russell の中年の男たちだ。彼ら三人とも「年々髪が抜けてきており、バトラーも申し訳程度にしか散髪できない (they are losing more hairs than Butler clips) (ER, 64)」のである。それでも彼らは義理堅くバトラーの店を利用してきている。この三人のバトラーへの気遣いは、「彼らは、必要に迫られてというよりは、バトラーへの敬意を表するために自分の頭を下げ、生え際周辺に限られた散髪の作業をバトラーにさせる (ER, 64)」という描写によく表れている。

なぜこれほどまでにこの三人は、バトラーに気兼ねするのか。それは彼らが、「頭の禿げかかった忠実な信徒 (These balding faithfuls)」で、それも「バトラーの日曜集会の主力 (the backbone of his Sunday congregation) (ER, 64)」だからである。店の古い客がバトラーの教会を支えている、という観点から、われわれ読者はここでバトラーの新たな側面も見ることができる。

バトラーが、自分の古い顧客であり忠実な信徒でもあるこの三人にどういう言葉遣いをし、彼らはそれをどういう態度で受け止めているのかは、「彼らは白いケープの下で両手を組んで、バトラーのとりとめのない八つ当たり (his wandering frustrations) を順番に、甘んじて受けている (ER, 64)」という文章に凝縮されている。この場面には無言の三人の強い感情が描かれている。彼らはバトラーの教会の信徒であるからには、バトラーからなんらかの救いの言葉が得られることを期待してきただろうし、バトラーの店に足を運ぶからには、いつかそこが、日常生活の苦しみからわずかでも解放される温かい雰囲気のみどり場になることを願っているのだろう。彼らはバトラーに、幸せになれる秘訣を求めてきたのだろう。ところが多情多恨のバトラーの口から際限なく出てくるのは、不満の言葉である。これはずっと前からなのである。

バトラーが、ギルモアたち中年世代とうまくいっているようには思えない。これはバト

ラーのどこに原因があるのか。

世代を考える

バトラーの年齢は、五十五歳くらいと思われる。物語の時代設定は1970年頃なので、1943年生まれの作者マクファーソンは、この時点で二十七歳である。ということは、バトラーはマクファーソンの父親とおよそ同世代であると見なされる。ちなみにマクファーソンは、父親ジェームズ・アレン・マクファーソン・シニア（1913-61）と年齢が三十歳差であり、シニアはラルフ・エリソンと同齢である。髪の毛の薄いギルモアは、作品の後半に出てくる彼の末の息子の年齢層から推測して、だいたい四十五歳前後である。ギルモアの年齢は、マクファーソンの親世代より十歳ほど若い。しかしバトラーはマクファーソンの親世代に属しているにもかかわらず、人物的には特異な存在のように映る。どちらかというところギルモアの中に作者の親世代の特徴が反映されているようだ。世代ということを考える際の重要な手掛かりとなるのが、1978年にマクファーソンが『アトランティック・マンズリー』誌に発表したエッセイ「アメリカ作家になること」“On Becoming an American Writer”である。なぜならばそこには、マクファーソンの親世代の特徴が書かれているからである。

バトラーはギルモアたちの散髪をしながら、若い世代の行動を批判する。

白人の奴らは、わしらの若い連中を騙してきた (have bullshitted our young men)。わしはと言うと、この隣の男（訳注—レイのこと）と同じくらいの自尊心はある。うちにやってくる若いもん (our boys) も、白人のガキどもがあのだらしなないこと (that mess) を始めるまでは、ちゃんと髪は切ってもらっていた。それは事実だ。まだ二年も前ではない。うちの連中は、土曜の夜などには壁を背にして並び、白人少年らを見ては、声を立てて笑っていた。ところがだ、あの白人のガキどもが勝手気ままに振る舞っているのを見ているうちに、たちまち、うちの若いもんまで髪をだらしなく伸ばし始めた。(ER, 64)

黒人は短髪でなくてはならない、というのがバトラーの信念のようだ。黒人の若者は同世代の白人にかぶれてはならない、ということなのだろうが、これはあまりにも不寛容な精神である。

若者は、その時代の文化に良くも悪くも感化されるものである。人が他者を見て、カッコイイ、と思うのはそこに美意識が働いているからであり、また、そういう感覚を若者同士で共有できるというのは、そこが自由な社会であるということの証拠でもある。真似をするというのは文化の交流である。純粹に良いと思って他者の真似をすることが、自分のアンデンティティーを捨てることにはならない。あれは自分にも似合う、それで自分はいつそう見映えする、と思うことは、むしろ自己肯定の確認ともいえる。さらに言えば、真似をする行為には必ず独自のアレンジが加わる。すると必然的にその模倣の過程で何か新鮮なものが誕生し、結果として多様性が今まで以上に広がることになる。

バトラーの文句を聞きながら、「ジョン・ギルモアは、頭を低く垂れ、口を真一文字に結び、目はケープの下で動いている自分の手を見ている (ER, 64)」のである。バトラーとギルモアの態度は著しく対照的である。バトラーは若者に干渉し、彼らのことが何から何まで気に入らない。一方ギルモアは現実、現在を我慢して受け入れているようだ。ギルモアはこの世の中を諦めて我慢しているというよりも、未来に希望を持っているようである。

このギルモアの内面を考察するためにも、私は、マクファーソンのエッセイ「アメリカ作家になること」を引用したい。

1954年、人種による別学を憲法違反として「ブラウン事件」判決が出されたとき、わたしは十一歳だった。当時、ジョージア州サヴェナの下層黒人社会のなかで生活していたわたしは、人種分けされた公立学校に通い、白人の顔見知りもおらず、白人と付き合いしたことなどまったくなかった。こうしたことが何か不利な立場であると考えていたという記憶はないが、幼いときから、白人とは社会的に付き合いはいけない「ことになっている」と堅く信じるように躰けられたという記憶はたしかにある。わたしの住んでいた町の中流階級の黒人の子どもたちが親から期待されていたのは、代々受け継がれてきた職業に憧れ、その職業に就くようになることだった。言い方を換えれば、親たちは貧乏人の子どもにあまり悶着 (too much trouble) を起こしてもらいたくないと思っていたということだ⁴。

1954年は、この作品の時代からおよそ十五年前のことである。架空の人物ではあるが、バトラーやギルモアも1954年を生きたことになる。バトラーもギルモアもアラバマ州の出身である。二人とも中流階級の黒人であろう。その1954年当時約四十歳のバトラーと約三十歳のギルモアは、現在と同じ町か、南部のどこかにいと仮定したい。当時ギルモアは前の世代の苦労を理解し、次世代の生活の向上とささやかな幸せを願って、黒人の貧困層の子ども、例えば店内にいるミッキー・ノリスとその友だちのような若者には、悶着を起こしてもらいたくないと思っていたのだろう。それゆえにギルモアは、黒人の若者たちの行動に対するバトラーの文句をぐっとこらえて聞いているのだろう。ギルモアは、黒人と白人の若者間での悶着も起こってほしくない。黒人の若者が白人の若者のヘアスタイルやファッションに憧れているうちは、双方はまだ平和な関係にある。ところがこういったことに対するバトラーの無理解と見当違いの怒りの言動は、ややもすれば、この平和な関係を壊しかねない。ギルモアは、バトラーに争いを誘発するような不用意な発言を慎んでほしいのだろう。

ギルモアにしてみれば、バトラーにはミッキーたちにもっと良い話を聞かせてほしいのだろうが、バトラーは人生の機微がわかる男ではない。バトラーは過去から大切なことを学ばなければならないが、彼の視野の狭さがそれをできなくしている。当時の黒人社会に生きる大人は、若者の前では暗い話をしたくなかった。エッセイの文章の続きにそのことが暗示されている。

当時は、皮膚の色の濃淡に基づいた、とても微妙でしかし現実的かつ社会的な区別

が明確に存在し、皮膚の色がより黒く、貧しい人たちがさらなる負担を背負いながら生活していた。とはいえ、貧富の差は関係なく、黒人社会全体に楽観主義が溢れていたのも事実である。さらには、連邦政府のやさしい配慮に対するある種の畏敬の念もあり、また進歩を信じる気持ちも培われていた。古い世代の人たちは自分たちが体験してきた人種間の軋轢や不満や失敗にまつわるあれやこれやのあまたの歴史を次の世代の若い黒人に引き継がせてはなるものかと決意しており、現在の時点で考えてみると、そうした強い決意が先に触れた黒人社会に明るい雰囲気醸し出していたのではないかと思う⁵。

当時バトラーが、同世代、すなわち現在の視点から見たら旧世代、のこの強い決意に共感し、その後の実生活においてその決意を実行したなら、共同体に生きる若者に対する彼の言動は全く違うものになっていただろう。

ギルモアのほうは未来に希望を持ったのだ。同世代、次世代とともに自分も、黒人にとって明るい時代に生きられることを信じたのだらうし、いまでも彼は未来を信じているはずだ。

押し黙っているギルモアの人生観の考察を深めるために、エッセイの続きを引用する。

さらには旧世代の人たちは、いわば言論を厳しく取り締まる自己検閲官だった。まるで、ある点では、何も語らず、沈黙を守る報酬として、神からでも、物惜しみをしない連邦政府からでも、のちに利益を受けることを自分自身とあるいは先祖と基本的かつ拘束力ある契約を結んだかのように、旧世代の人たちは自らの苦労話を自己検閲し、語らなかつた。こうした契約を法的には「条約先行的」契約という。したがって、旧世代の人たちが、知り得たことをわたしたち新世代に伝えなかつたため、わたしたち世代は知り得たかもしれないことを十分に知り得ないという結果になってしまった。その一方で、まさに知り得なかつたおかげで、わたしたちの世代の多くは、あるいは被っていたかもしれない、気が滅入るような暗黒の歴史物語の悪影響を受けずに済み、知らぬが仏とばかりに、自分たちの経験から生み出された明るい歴史物語を紡ぎ出そうとさえしていたのだ。たしかにわたしたち若い世代が生きていたのは、限定された狭い世界だったが、そこには未来に対する可能性が溢れていた⁶。

ギルモアは、先輩たちの過去の苦い物語を胸にしまって、若い世代が活躍する世界を思い描いて、自分の役目を果たそうとしている。ギルモアは、自己検閲をする旧世代の苦労を無駄にはしたくないのである。若者たちに余計なことを告げたくないのだ。だがバトラーは、同世代の中でも特異な存在のように思える。これは人間を世代では簡単にくくれない、ということも物語っている。

私は、ギルモアの役割を、旧世代と若い世代が繋がった、いわば世代列車の連結器に喩えたい。先頭が若者世代車両で、後方が旧世代車両である。二車両は力を合わせて前進する。この二つが切り離されないように、連結器ギルモアは踏ん張っているのである。列車の向かう先は、トンネルの向こうの今よりも明るい時代である。

ギルモアの内面

かつてはバトラーの店も賑わいがあったようだ。店内では賭け事や言い争いが派手に行われ、チェッカーゲームには人が群がり、セクシー姿の女性までも出入りしていたようだ。バトラーは、ラジオから流れる黒人霊歌をハミングして仕事をしたり、他の客の散髪しているレイと立派な説教 (righteous homilies) のやり取りをしたりしていた。だがここにあるものはただの喧騒にすぎない。それは活気というのとは違う。かつてのバトラーの店が、エリソンのいう、「気取らない自然な肯定的空気を発見」できる、自分たちの本音の言える場所であったようには思えない。なぜならば、店に集まってきた人の悩みを聞いてあげたい、彼らを元気にしたい、といった店主の目配りや思いやりがこの空間を包んでいないからだ。立派な説教とは、聖書に題材を得たものなのだが、必ずしもすべての人が散髪をしてもらいながらそれを聞くことを望むわけではない。一昔前のバトラーの店は、景気は良かっただろうが、心の潤いを得られる場所ではなかったのだろう。

当時店に人がたくさんいても、ギルモアたちの内面は満たされることはなかったのだろう。そのことは次の文章から汲み取ることができる。

当時を覚えている男たち—ギルモア、ケンドリックス、それから他の者たち—はあの頃を取り戻したいとも思う。しかし、過去を独占しすぎることへの暗黙の恐れがあるし、それと、現在が完全に見えなくなるとはいけないという決意がある (there is an unspoken fear of being too possessive about the past, and a determination not to allow the present to slip out of focus)。彼らは店のドアから一步出た外の世界を認識している。バトラーに散髪してもらったら、自分たちはさっさと支払いを済ませて立ち去るほうがずっと簡単であることに、気づいているのである。(ER, 64)

ずっと簡単である、というのは、否定的な言葉に触れないためには、それを発する人物のいる空間から一刻も早く立ち去るが一番いい、ということである。あえて相手の間違いを正そうとしない、ということである。ギルモアはどうにもならない過去に縛られたくない。現在をしっかりと見つめたいのだ。今を見つめられないバトラーからは離れたいのである。今は良い時代になった、と言ってくれる年配者と一緒にいたいのだろう。

短編集『エルボー・ルーム』の二番目に収められた作品に、「ある死人についての話」“The Story of a Dead Man”があるが、この物語にバトラーと同年齢くらいの黒人男性が登場する。語り手の婚約者であるチェルシア Chelseia の父レイモンド氏 Mr. Raymond のことである。レイモンド氏は、自宅に来てくれた語り手ウィリアム William、それとそのいとこビリー Billy の成功を心から喜んでくれる人間である。マクファーソンの言葉を借りれば、レイモンド氏は昔、「沈黙を守る報酬として」次の世代が「のちに利益を受けることを自分自身とあるいは先祖と基本的かつ拘束力の契約を結んだ」一人であろう。レイモンド氏は、自己検閲を解除したかのように、嬉しそうにこう反応する。

レイモンド氏はため息をつき、頭のとっぺんをなでていた。その頭は禿げあがって

いた。レイモンド氏はこう言った。「こうやって若い世代が優遇措置を受けられるのを見るのは、実に気持ちのいいものだ。なにしろ、私の時代は、学位を二つ持っても、せいぜいなれたのはユニオン駅での赤帽だった」⁷

レイモンド氏は、語り手やビリーの世代の成功に、自分たち旧世代の黒人の苦労が報われた思いがしたのだろう。ギルモアはおそらくレイモンド氏のような先輩と話をし、一緒に、若い世代の成功をこれから喜びたいと願っているのだろう。

現実を歪んだ目で見ている理容師バトラーから逃れるために、客のギルモアがバトラーの店にいる時間を少なくするというのは、良い考えである。けれども問題なのは、バトラーの信徒であるギルモアは、日曜日にはバトラーから逃れることはできない、ということである。

「お前が彼の教会の信徒でなければ」ジョン・ギルモアは礼拝から帰ると決まって妻に言う。「俺はあそこになんか通うもんか」

「ねえ、お願いだから、あなたまであの人を困らせるようなことはしないで (Now don't you be no trouble to him)」マリー・ギルモアは夫に念を押す。「あの人にあれ以上のことは望めないのよ (He ain't got much longer to go)」(ER, 64-65)

牧師バトラーにはこれ以上の進歩はない、ということのマリーは理解したうえでバトラーを受け入れているようだが、ギルモアは牧師としてのバトラーの態度にもうんざりしているようだ。果たしてバトラーは、どのような牧師なのか。

牧師としてのバトラー

バトラーは説教を変えてもそのテーマが変わらない。カイン、アブラハム、サウル、ダビデ、ヨセフ、ヤコブ、イサク、エサウ、リベカ、アブサロム、ヨアブラの名前が一気に出てきて、信徒は半ば強制的に「アーメン」を言わされて、その声が小さいと、バトラーから言い直しを求められる。彼の説教の部分を文字で読んでいる私にとってその内容は極めて難解で退屈なのだから、聞いている側にはもっとつまらないものであろう。バトラーには、信徒の胸に届くようなわかりやすい話をする工夫が欠けている。それでもこれまで彼の教会に通ってくれていた親戚がわずかながらいたのだが、最近はその親戚ですらだんだん彼の説教に飽きてきている。そのうちの誰かは、もっと迫力のある説教を聞きたいために138通りにあるターウェル Tarwell 牧師の教会にすでに通っている。

ターウェルが人格的に特に優れた牧師である、とは必ずしも言えない。言えるのは、ターウェルは信徒の興味を引きつけるにはどうしたらいいのかを心得ており、それが実行できるのである。例えば彼は復活祭の礼拝式で、自ら磔はりつけにされた格好をして、その十字架から全会衆に説教をする計画をずいぶん前から立てたりする。そういった南部の復活祭の遺風は人々の気持ちに訴え、最年長者らは郷愁に駆られることをターウェルは承知している。ターウェルはこのように、人心しゅうらんを収攬するコツを知っているのである。

バトラーの妻エラ Ella は日曜日に夕飯を食べながら、会衆を辟易させている馬鹿げた説教の仕方をやめさせようとバトラーを説得するが、バトラーは理解してくれない。バトラーは、自分は良い礼拝を執り行っているのに、信徒が聞いてくれない、と言い張るのである。

マクファーソンは何ゆえに、月曜日から土曜日までは理容師で日曜日には黒人教会の牧師、をしているバトラーという人物を作り上げたのか。その職業の設定と、その客や信徒らの反応を見ていくと、マクファーソンの狙いがわかってくる。バトラーが兼業する理容師と牧師は、一見別種の職業のようだが、実際は共同体の人々の幸せにとって同じ役目を担っているのである。世俗の世界と聖なる世界のこの二つの世界は、それを担う人間の心の持ち方しだいでは、見事に調和できるものである。

理容師と牧師の働きは本質的には同じ

バトラーは自分のことを振り返り自分のやり方を少し変えてみようという発想の持てない人間である。この頑迷さは、理容師と牧師を兼業する者にとっては大きな欠点となる。本来黒人共同体におけるバトラーの仕事は、人々の心を楽にしてあげて、人々に、また明日も生きたいという気持ちを起こさせるためにある。その場合、理容師兼牧師は、つまらない自我やこだわりを捨てなければならない。人の幸せのために自分の思考形態を柔軟に変えていく、人を見て法を説くような、態度に徹していかなければならない。理容店では客の浮世の苦しみをひたすら聞きその人の置かれた立場を肯定し、教会では神の愛を信徒に語りながら彼らを人間として肯定し続ける、という使命がバトラーには託されているのである。バトラーは理容店と教会で共通の人間と接している。したがって、理容師と牧師のこの二つは、職種は異なるものの、人々の精神に及ぼす影響という点では連続性のあるものである。理容師も牧師も人に喜ばれる存在であるべきである。

ところがバトラーがこの二つの仕事を通して作り出したのは、負の連続性である。自分の説教を真剣に聞けないのは信徒が悪い、若者が流行りのおかしなヘアスタイルを求めているのは墮落の兆候だ、とバトラーは考える。つまり自分に人気がないのは相手が悪い、ということになる。これではみんなに喜ばれないし、みんなとのコミュニケーションも成り立たない。

バトラーとのコミュニケーションの困難さ〈その1〉

妻のエラに説教の仕方を注意され、頑固なバトラーはふてくされてしまう。エラはこの説教の話題でのバトラーとのコミュニケーションに失敗する。そこでエラは話題を変えて、理容店の営業種目について触れる。

「あなたがお客さんにアフロヘアをしてあげる『必要は』ないのよ。それならレイができるの、だからあなたは常連さんの散髪ができるのよ。そういうふうに分業することは何もおかしなことではないのよ (ER, 66)」とエラは水を向ける。このエラの提案は、バト

ラーから仕事を奪うこともなく、そのうえレイの自己重要感を高めレイの技術も生かすことができ、店の繁盛にも繋がる、建設的なものである。またこのアイディアは、エラがバトラーとのコミュニケーションを取るきっかけとしてちょうどいいと思われる。

ところがバトラーの反応は「レイに『俺の』店でおかしな (fancy) カットをさせるわけにはいかない。一番の理由は、そういう若者を店に出入りさせてみる、常連客を追い出すことになる。そんなことぐらいわかるだろ (ER, 66)」と、まるで木で鼻をくくったような調子である。バトラーは、他者のアドバイスや提案を頭から否定する。彼の中には、人の意見に対する否定が前提としてある。それゆえ彼は、相手の意見をとりあえず聞き入れて、それを実行に移した際の良い点と悪い点を互いに検討するという方向には進めない。これでは誰ともコミュニケーションをはかることはできない。

バトラーの反応に、話の接ぎ穂を失ったエラはイライラした気持ちになり、そんな考えでは店も長く持たないし、説教だって聞いてくれる人もいなくなる、と言う。ここで夫婦のコミュニケーションは途絶えてしまう。

バトラーとのコミュニケーションの困難さ〈その2〉

また暇な月曜日があった。店の景気を良くしたいレイは、バトラーにストレートパーマ (process) を営業種目に入れたいと懇願する。いまどきは、それをやっても白人の真似をしていると言う人はいないし、周りにはそういうヘアスタイルの黒人の若者がいる。これまで白人が黒人の真似をしてきたのだから、自分たちが黒人にストレートパーマをかけてやっても許される、ということをレイは笑いながら、バトラーに理解を求める。レイのこの提案は、バトラーに受け入れてもらえるのか。

バトラーの返事は「ストレートパーマなんかやらない」とにべもない。それでも、商機はそうはない、と理解を求めようとするレイの言葉をバトラーは「それは悪魔のやることだ (It's devil's work) (ER, 67)」と言下に否定する。ここで従業員レイは店主バトラーとのコミュニケーションを断たれてしまう。

ここでのコミュニケーションの不成立の原因は、「自分の年になったら変えることはもう無理 (change is just hard) (ER, 67)」というバトラーの思い込みと、若者たちを楽しませようという発想の欠如、にある。「レイ、君は若者の髪を整えてやることで相手の人生を形作ってやれるのだ (You can shape a boy's life by what you do to his hair) (ER, 67)」、そういうことはみんながみんな、できることではない、とバトラーは言う。自分はそれをやってきたことに誇りを持っているし、これからもそうする、と店で暇を持て余しているミッキーを見やりながらバトラーは持論を展開する。つまり、若者の人生の乱れは、髪型の乱れから始まる、ということなのだろう。逆を言えば、理容師が若者の髪を短くしてやれば、彼らの素行は悪くならない、この町から不良はいなくなる、ということになる。

ここで明らかになったのは、理容師バトラーを支えているのは、若者の人格形成のために自分は常に何かをやらなければならないという義務感である。これはバトラーが、基本的に牧師の視点で若者を見ているからであろう。その際彼は、自分の道徳規範しか信じな

い。この道德規範は、彼に、他者や流行を頭から否定させる。この道德観はバトラーの偏見と不寛容の精神の元となっており、この道德観ゆえに彼と町の人々との間に軋轢が生じているというのが現実であるにもかかわらず、自分が正しいという信念を持つ彼は自分を改めることができないのである。

与えるということの大切さ

バトラーの人生は、ツイてない。それは、彼が理容師としても牧師としても、自分というものを人に与えるとか捧げるとか、そういうことを彼らにしてこなかったからである。与えるということは、相手の立場を尊重し、その言い分を聞いたり、肯定したり、相手に共感したり、相手に感謝したり、することである。そういうふうに関わり合う相手に何かを与えるとか譲る、というのは大切なことである。なぜならそこには愛があるからである。

理容師としての技術や牧師としての説教の才能が欠如していても、考え方を少し変えるだけで、バトラーは社会から取り残されないで済んだであろう。むしろ人に喜ばれる存在になったであろう。そのことを、考えていきたい。

譲ることができない理容師バトラーは人を悲しい顔にさせてしまう

火曜日の午後、レイは店を辞めなければならないことを、目をそむけながらバトラーに伝える。レイは理容師として家族を養っていかなければならぬのだ。そのためにレイは145通りの新しい店に行くことにしたのだ。これはレイにとって、つらい決断だったと思う。

しかしレイのこの苦渋の選択に対して、バトラーは苦笑いを浮かべて「あんたが行っちゃくと、わしの運もこれまでかな (maybe my luck will change some now with you gone) (ER, 69)」と返答する。このバトラーの言葉は、裏を返せば、自分がツキに見放されているのは、人のせいである、と解釈することができる。ここにある精神は、人に何かを与えるとか譲るとかという精神ではなく、自分のものが誰かに奪われてしまう、という精神である。こういう精神の持ち主と接すると人は悲しい気持ちになる。だからバトラーのこのセリフを聞いた「レイは悲しそうな顔をする (Ray looks sad) (ER, 69)」のである。レイは「これは、『運』とは、何にも関係ないですよ、牧師さん (It ain't nothing to do with luck, Reverend) (ER, 69)」とため息をつくしかない。

理容師バトラーはどういうふうに関わり合いを変えなければならないのか。頑迷な彼にとって、自分を変えるというのは困難なことなのだろう。だがそれでも、バトラーに言っても無駄なことではあるけれども、最後のレイのバトラーへの訴えは正鵠を射た指摘である。

「この『おいらたち』除いたら、床屋はみんな切り替えていますよ。いまはもう、『理容学校』でだって、南部の時代遅れのカットは教えていませんよ。牧師さんは、『頑固者なだけ』ですよ」レイは、胸に募った思いをなるべく抑えるかのように、間を置

いた。「牧師さんだって、儲けたいでしょ？ だったら簡単なことですよ。余計なこととはなくていいのですよ。牧師さんは調髪するだけでいいですよ、『調髪』ですよ！」自分の顔を再びなでて、その乱れた口髭を直しながら、レイはため息をつく。「牧師さん。年をとってきたんですから、前を向いていくべきです。おいらがやっているのはそれなんです。おいらがやっているのは、それが『すべて』ですよ」(ER, 69)

バトラーは、レイが活躍できる場を、自分の店の中で譲ってあげるべきであった。バトラーはレイにやりがいのある仕事を与えるべきであった。つまらない自我を捨てて、レイの立場になってレイの幸せを考えて、その話を、その願いを聞いてあげるべきだった。バトラーは目の前の相手に自分を与えるべきだった。ところが心の狭いバトラーは「わしはあんたの常連客を引き受けるよ (ER, 69)」としか言えない。レイはあきれれる。分けあうほどの常連などいないのだ。バトラーとレイが互いの髪を切って、たまに、ラッセルやギルモアが義理でここを利用し、おまけに彼らはバトラーに恥ずかしい思いをさせられる、それだけである。レイの言葉を聞いても、バトラーの言動の根底にある精神、誰かに自分のものが奪われるという、精神が変わることはない。

自分のものが奪われるのが嫌なバトラーは、レイの怒りに気づくことはない。バトラーはレイに、自分の持ち物を持って出て行くよう命令し、吐き捨てるように「いいかい、あんたは145通りまで、この店の評判まではもっていけないよ (ER, 69)」と言う。これは理容師としての自分の信用をレイによって奪われる、というバトラーの恐怖から出た言葉である。店の評判も信用も、もうほとんどなくなっているのに、このセリフはわれわれに虚しく聞こえる。そしてそれを言われたレイは後悔と陰鬱な気持ちを抱えて黙り込んでしまう。

自分のものを譲れない者からは人は離れていく。レイはバトラーから去って行く。

譲るということができない牧師バトラーから人は離れていく

レイがストレートパーマの話を持ちかけたあの月曜日の午後に、ギルモアがやってきた。散髪をしてもらいながらギルモアはバトラーに、教会のことで相談を持ちかける。将来政界進出を計画しているターウェルが、自分の教会の副牧師としてバトラーを考えている、ということを、ギルモアはバトラーに伝える。ターウェルは牧師を引退したら、自分の教会を引き継ぐ誰かを探しているようだ。

ここでわれわれは、バトラーが不寛容であるだけでなく、排他的な思考の人間でもであることを知る。ターウェルの信徒は多くがサウスカロライナ出身である。バトラーの信徒はアラバマ出身がほとんどである。これは大きな違いである、とバトラーは一方的に決めつける。バトラーは信徒の出身地へのこだわりと執着心が激しい。それと、バトラーは、ギルモアがターウェルの教会の心配をするのが気に食わないのである。ターウェルの方から、バトラーの教会に、自分の信者を連れ来るべきだ、と考える。バトラーは、信仰上の救いを求める人に神の愛を教えることよりも、自分の縄張りを優先してしまっている。自

分の信徒を奪われることに腹を立てて、自分の面子と縄張りにこだわる。彼は、自分を与え、自分の何かを誰かのために譲ることができない。そういう偏狭な考え方しか持てない牧師のもとから、人は離れていく。

別の月曜の閉店間際にジョン・ギルモアが来店した。髭を剃ってもらうためでも調髪してもらうためでもない。目的は、妻のマリーがカルバリ（キリストの磔）には、バトラーの教会には戻って来ない、ということ告げるためである。ギルモアは勇気を振り絞ってその用件を言う。マリーもターウェルの教会に行ったのである。それを聞いたバトラーは、マリーは教会の素晴らしい案内人を務めてくれた、と言い、「今度はその素晴らしいものまでも、ターウェルはこのわしからだまし取った (ER, 71)」とターウェルを責める。ここにも、誰かに自分のものが奪われる、というバトラーの発想が見てとれる。バトラーのこの発言に対してギルモアは、原因はターウェルではなくバトラーにある、という含みで「あなたは自分自身を打ち砕いているのですよ (You beat yourself) (ER, 71)」と反論する。マリーは、ターウェルの所に積極的に行きたかったわけではないのである。ギルモアはこれまで妻の顔を立てて、バトラーにつきあってきた。しかし、時代の流れを受け入れて自分を変える、ということのできない偏屈なバトラーにギルモアはいら立ちを覚え、ギルモアは喧嘩別れのような形で、バトラーから去って行く。

自分のものに対する執着心と、自分のものが奪われるのではないかという恐怖心が、激しくなればなるほど、バトラーの手から多くのものが失われていく。

孤立するバトラー

バトラーのもとを人が去っていったのは、彼の理容師としての技術や牧師としての知識そのものに問題があったからではない。理容師としては、彼には、自分を助けてくれるはずの人のその能力を生かすという配慮がなかったからである。彼はレイの良さを生かすことができなかった。レイの提案を頑なに拒んだ。バトラーは、牧師であるのに、人を信頼することができず、目の前の人に愛の言葉を掛けることを怠った。すべてにおいて、自分の持っている何かを人に与えることができない、彼のその独占欲の強さが、彼を共同体の中で孤立させている。共同体の人々を聖俗の両面でつなぐパイプ役を果たせる仕事をしている、そのことへの感謝の心を忘れ、感謝の言葉も知らず、自分の運の悪さを他人のせい、時代のせいにして、その彼の生き方が彼を孤立させているのである。バトラーは、失わなくてもいいものまで、失っていったのである。

ギルモアが店を出た後、バトラーは午後ずっと一人、どっかと椅子に腰を掛けて、自分の置かれた状況についてメモを取る。バトラーは店を畳むことも考える。バトラーにはある程度の貯えがある。店の所有権は間違いなく彼にある。彼のメゾネット式アパートの二階部分は学校教師に貸している。目をかけているミッキーの将来が心配になる。故郷南部のことが胸を去来する。われわれ読者は、ここで、バトラーの静かな人生の締めくくりを予感する。彼の世界観の大きな変化をわれわれは期待する。ひょっとして、バトラーがここから粹な人間に変わるのではないかと。

しかしそんな変化は起きなかった。それどころか、彼はこのあと、理容師としても牧師

としても最悪のことをしてしまうのである。

気づいたら一人の少年がバトラーの椅子の横に立っていた。少年は「アフロにできますか」とバトラーに聞く。少年の名前はトミー・ギルモア Tommy Gilmore。ギルモアの末の息子である。かつてバトラーは、ある夏の日、猛暑の信仰復興集会でトミーに洗礼を施してやったのだ。トミーは、小学校高学年くらいの年齢である。散髪代は一ドル五〇セントなのだが、あいにくトミーの手持ちは一ドルしかない。料金の折り合いがつかないので、ここでバトラーは断るべきである。しかしバトラーはトミーの散髪を引き受ける。トミーはアフロにしてほしい。バトラーにはアフロの技術はない。この段階で本来だったら商売の取引は不成立である。

われわれは、言葉を使って正しいコミュニケーションを取る努力をしなければならない。牧師の仕事はすべて言葉によってなされるものである。したがってバトラーは、言葉の大切さを誰よりも認識しなければならない。けれどもバトラーは、相手が子どもだから見下しているのか、トミーに対して、言葉を粗末にした扱いをしてしまうのである。

バトラーは言葉できちんと次のことを伝えるべきであった。まず、散髪代が五〇セント足りないから、君の髪は切ることができない、と。それから自分にはアフロヘアの技術がない、と。さらに、子どもがアフロヘアをするのは教育上良くないと自分は考える、と。それでも子どもらしい短髪でよければ、一ドルでもやってあげてもいい、と。

そういうことをトミーに言葉で丁寧に説明してあげて、その提示された条件にトミーが納得してはじめて、バトラーはトミーの散髪をすべきである。トミーに選択の権利を与えるべきであった。ところがバトラーは、子ども用の厚板椅子を両方の肘掛の上に交差するように乗せて、その上にトミーに座るよう促す。「最高に子どもらしい髪型にしてやるよ (I'm gonna give you the nicest schoolboy you ever seen) (ER, 73)」と言う。この威圧的なバトラーの態度に怯えてしまったトミーは、自分の気持ちをはっきりと伝えることができなくなってしまう。子どもらしい、というのはアフロではない、ということを知っている。もじもじしながらも、トミーは結局、厚板の上に座るしかない。散髪を始める前にバトラーは少し間を置く。店に戻ってきたミッキーに対してバトラーは「よく見ている、ミッキー、勉強になるから (Now look here, Mickey, and you'll learn something) (ER, 73)」と命令する。それからしばらくして、バトラーはトミーの散髪を開始する。凄まじい勢いで、バサバサとトミーの髪を刈り上げていく。十分間で作業は終わる。仕上がりの結果にトミーはしくしく泣く。これはあまりに無神経でひどい仕打ちである。

バトラーは人との衝突が絶えない。それは、彼が、弱い立場の人間のことを全く理解できていないからだ。何も抵抗できない状況にいる人間のことを力で制圧し、深く傷つけてしまうからだ。

このあと、カンカンに怒ったギルモアが泣いているトミーを連れて店を訪れる。もしもバトラーが牧師でなければ殴りつけてやるところだ、とギルモアはバトラーを非難する。いまだきこんな髪型の子は学校にいない、自分の子は、プランテーションの黒人、つまり奴隷の子ではない、とギルモアは抗議する。バトラーは、トミーは一ドルしか持っていなかった、と正論を返す。それに対してギルモアは、それなら息子にほかへ行くよう指導すべきだった、と反論する。それでも頑固なバトラーは自分の過失を認めようとししない。この髪型がこの子によく似合う、と言い張る。怒りの治まらないギルモアは、店も教会も閉

鎖に追い込んでやる、とバトラーに徹底抗戦の態度を示す。

相手の意に沿わない髪型に勝手にしてしまうバトラーには理容師をする資格はない。そのうえ、人を怒らせ傷つけるバトラーは、牧師をする資格もない。職人としての最新の技術がなくても、説教師としての斬新なアイデアと人を引き付ける話術がなくても、相手を認め、相手を肯定し、言葉で誠実に接する努力をする人間なら、世の中で孤立することはないだろう。

何も言えなくなるバトラー

バトラーにはどういう最後が待ち受けているのか。復活祭が近づくにつれて、バトラーの会衆はターウェルの教会に気持ちが惹かれていく。そんな中、マリー・ギルモアが戻ってきている。しかし、彼女はバトラーの説教を聞きに来たのではない。紫色のドレス姿のマリーは、部屋の奥のほうで視線を下に落とした姿勢で着席している。黙ってうつむいている彼女には、思うところはたくさんあるのだろう。

バトラーはいつもとは違う落ち着いた声で説教を始める。「われわれは頑固な民である (We are a stiff-necked people) (ER, 76)」。この出だしのあと音楽が流れ、それから彼はこう続ける。「人間はあっちを向いたり、こっちを向いたり、する。しかしみなで一斉に一つの方向を向けば (Our heads turn thisaway and thataway, but only in one direction at a time) (ER, 76)」。ここでバトラーは間を置いて、「われわれは判断を下される (We'll be judged for it) (ER, 76)」と言う。「判断を下される」というのは、神の裁きが下される、ということなのだろう。バトラーは、会衆に何を伝えたいのだろうか。

すると、これまで後ろの席で黙っていたマリーが突然立ち上がり、こう叫ぶのである。「誰が私たちを裁くというのですか？ (Who go'n judge us?) (ER, 76)」。まわりはぼかんとした顔でマリーを見つめる。マリーは震える声で、次のようなことをバトラーに問うのである。何が裁かれ、何が裁かれない、というは、誰にそれが言えるというのか。何が決まりか、それを確かに言える人は誰なのか。その決まりがどこに書かれているのかを示せるのは誰か。誰にそれが言えるのか。これは、マリーの胸に募っていた疑念なのだろう。私は、ここでマリーの疑念を考えたい。いつも誰かとぶつかっているバトラーに神の裁きについて語れる資格があるのか。自分の息子を傷つけたバトラーの言葉をどこまで信じればいいのか。バトラーに、真実を言える資格はあるのか。感情の乱れの中、マリーは答えを求めているのだろう。

マリーの訴えを聞いたバトラーは、説教壇の向こうに立ちつくし、何も言えなくなる。これはバトラーにとっては予想外の問いかけだったのだろう。彼は当然自分には、その決まりを言える資格があると思っていたのだろうから。

バトラーがここまで孤立した理由を振り返ってみたい。彼は時代の流れや文化の変化に心を閉ざしており、流行に対して偏見が強く、不寛容である。他者の言うことを頭から否定する。他者の良さを生かせない。人に自分というものを与えるということができない。自分のものが誰かに奪われるという考えが強い。自分の仕事の持つ役割について理解ができず、感謝の心がない。そして最大の理由は、言葉を大切にして、相手を理解し相手に自

分を理解してもらうための努力ができない、ということである。これは理容師としても牧師としても致命的な欠点である。

日曜日の夕飯時に、妻のエラに今後どうするかを聞かれたバトラーは、きちんとした返事をする事ができない。店も教会もやめるのか。彼には何も思い浮かばないのだろう。人を変えるのではなく、自分を少しでも変えようとしないう限り、バトラーには新しい生き方を永遠に見つけ出すことは不可能だろう。

そういうバトラーを見つめるエマはため息をついてこう呟く。「どうして私はこんな『頑固な』人と結婚しなければならなかったのかしら (Lord, why I had to marry a man with a *hard head*?) (ER, 76)」

それに対してバトラーは、それ以外に良い方法がなかったから、としか答えない。バトラーとエマは、今後二人で、良い生き方を見出すしかないのだろう。

注

1. James Alan McPherson, "The Faithful" in *Elbow Room* (New York: Charles Scribner's Sons, 1987), p. 62. 以下この短編集からの引用はこの版による。カッコ内の ER は *Elbow Room* を、数字は頁数を示す。
2. Ralph Ellison, "The Same Pain, That Same Pleasure: An Interview" in *Shadow and Act* (New York: Random House, 1964), pp. 8-9
3. Ibid., p. 9
4. このエッセイには、翻訳がある。儀部直樹・山西治男 共訳『英語英文学論集』第28集(2000年3月)、p. 80. 翻訳した当時は原書『アトランティック・マンズリー』誌(第242号)に発表された "On Becoming an American Writer" を使用した。これは、2002年2月発行の氏のエッセイ集(『故郷ではなく地域』)にも収められている。今回の引用箇所(注の4、5、6)は『故郷ではなく地域』のものを用いた。
A Region Not Home — Reflection from Exile (New York: Simon & Shuster), pp. 17-18.
5. 翻訳の81頁。
6. 翻訳の81頁。
7. James Alan McPherson, "The Story of a Dead Man" in *Elbow Room*, p. 37

Received : April, 26, 2017

Accepted : June, 7, 2017